

音楽科授業における記録と観点について — 指導法の学習の質を考える —

藤 田 光 子

Records and Perspectives in the Music Class:
Considerations regarding the Quality of Learning Teaching Methods

Mitsuko FUJITA

【要 旨】

教員養成段階の模擬指導に関する研究をこれまで継続してきたが、学生が模擬的に行われる音楽授業に関して、どのような観点で記録を取り、また評価しているかという傾向を探る。学生は模擬授業後の話し合いにおいて、議論を交わしながら、共感できる部分と、改善を求める部分について記録を取る。またその授業を受け評価を行う。これらから教員養成段階の学生が、音楽的スキル面、伴奏面、教師の知識面に観点を置き、模擬授業を受けている傾向が明らかとなった。これにより今後、この段階での音楽授業において学生が着目する観点を知り、内容について内容改善を検討する一つの糸口となった。

【キーワード】

模擬授業 記録 観点 授業改善

1. はじめに

学生は音楽授業を実施する場合の評価の際どのような観点をもち他の授業者の授業を評価しているのか。何に重きを持ち、どのような観点で他者の授業の評価を行い記録を取っているのかという視点から本研究を開始した。

特に音楽に関する指導法を学ぶ科目においても、学習指導要領の改訂時期を踏まえ教育内容について状況を確認しつつ、これまで改善を試みてきた。平成29年小学校学習指導要領の改訂内容が明らかとなり、32年度には小学校におい

て全面実施を迎える。過渡期に小学校教諭となる学生にとっては学習内容・教育内容についても対応しつつ学びを深めていかなければならない。

小学校音楽科としても小学校学習指導要領の改訂に伴い、教育の3要素として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」が明示され「個別の知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」という3つの柱が打ち出されたことにより、音楽科における目標にもその要素が盛り込まれた。「何ができるようになるのか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」非常に重要な要素と

なる。さらに小学校音楽の内容構成にも変化があり、「他者と協働しながら音楽表現を生み出す」「主体的・対話的な学び」そして「深い学び」という課題が提示されている。評価の観点についてもそれに伴い変化が見られている。

しかし教員養成段階での学生の現状を知ることが、今ある必要性と学習内容・授業改善としては必須であると考えている。また、高等教育の方向性としては「何を学び、身に付けることができるのか」を中軸に据えた学修者本位の高等教育への転換¹⁾が中教審によりその方向性を示されている。教員養成の段階においてもその方向性を踏まえた学習改善が必要である。

また以下中教審では①～③の授業改善に向けた工夫の視点が挙げられているがこれに基づいた方向性を持ちつつ音楽科の授業改善に向けた研究を進める。

[表1] 「主体的・対話的深い学び」の実現に向けた授業改善 中央教育審議会

<p>「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善</p> <p>① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。</p> <p>② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。</p> <p>③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。</p>

2. 問題と目的

学習指導要領の改訂時期にあたり、主体的学びとは何か。対話的学びとは何か。そして育成を目指す資質・能力の3つの柱とはいかに学び実践し、指導する立場となればよいのか教員養成課程におけるその学びとはどのように身に付け、どのように学ぶべきであるのか疑問も多い。

指導要領改訂の年であり、現行の指導要領を学びつつ新学習指導要領への移行を味わう年そのたびに養成校においてはその困難さにおいては毎回改訂期の深い理解と学びへつなげる役割を担っている責任の重さを感じている。本学の教員養成段階にある学生はまだ多くの授業実践の経験があるわけではない。そこで相互に模擬授業を受ける中で様々に経験を重ねていくことになる。しかし、音楽授業のなかで自信が持てず、現段階において何をすべきかを知ることが非常に難しい。これまでの研究においては、自身の課題について明確にすることを目的に研究を進めてきた。そこで学生が模擬授業の記録をとりながら、どのような視点で授業に関して共感的な内容、改善的内容であると感じ、評価を行っているか。それを明らかにすることで現状その不足する部分について補いつつ授業を進めていく必要性が感じられる。短い時間での即戦力としての教師像を期待される昨今であるが、教員養成段階だからこそ十分にできること、その役割も多いと考えられる。

平成28年度の研究においては、音楽授業に大切なものという問いに関しては、音楽的技術は低く教材研究や教師としての技術が高かった。教師に関する思いや技術を特に注視していることが窺える。ただし、学生が実際に授業を行う段階で他者の授業を受けつつ、自身の状況なども考えながら、記録し評価していく段階においてはどのような観点をもちその重要性をどこに感じているかは、明らかではなかった。

そこで他者とピア評価を行いつつ、他者の授業を受けて感じ得ることを共感できる部分と改善した方がよい部分を検討しながら、記録に残

し、自身の今後につなげ、指導に結びつけることができるよう、相互の共感的 content、改善的 content も含め記述 content の実態を知ることで、教員養成段階の学生の評価観点を紐解く。学生自身と模擬授業を実施した学生もともにリフレクションできる状態を目指している。

相互評価については様々な方法があるが、ここでは実践的経験値の低い学生に他者の記録を取ることで、さらに幅を広げていき、深まる学びへと導いていけるよう実践している。

3. 方法

(1) 評価における観点傾向の把握

- ・平成28年度平成29年度教員養成段階の学生の音楽科模擬授業記録
- ・模擬指導実施後にそれぞれが記述した記録を調査しキーワードの出現回数からその評価観点の傾向を探る

(2) 評価の傾向

- ・平成28年度平成29年度教員養成段階の学生の音楽科模擬授業評価
- ・実施授業における評価の状況と(1)の観点の傾向から評価の傾向を知る

* 調査にあたっては授業研究に使用する旨、個人が特定できない調査であることに同意を得ている。

4. 結果と考察

(1) 模擬授業後に記述された学生のコメントから、同一キーワードにおいても否定的 content によるものか肯定的 content によるものかを分け、検証した。そこでキーワードとなる文言の出現から学生がどのような観点で模擬授業を受け、評価活動を行っているかを検証した。改善的キーワード全321、共感的キーワード全281とデータ個数は少数であるため、記録されたキーワード数とともに記録内容より考察を行う。

その結果、共感的 content に関するキーワードの

中では、「教具、声、声掛け、歌詞、言葉、準備、発表、めあて」が上位に位置し、授業を実施する際の準備段階のもの、教師の発するものに集中していることが分かる。この上位8の観点だけで、3分の1を全体が占めている。特に最上位である「教具」については学生が授業内において特に着目している。授業内容自体だけでなく準備また授業をより効果的にする教具において着目していることは、教材研究にもつながる部分であり、養成段階の学生が重要視していることがわかる。

また改善的 content においても、「発表、時間、言葉、ワークシート、説明、歌詞、板書、ピアノ、めあて、楽器」の授業内容に直結した部分に観点を置いていることがわかる。この10項目だけで3分の1を占めている。発表については特に多く、この改善的 content において、発表に関する準備、児童への伝え方、発表する目的など形式にとられることで、発表内容が薄くなっていくことを疑問視する見方が見受けられた。

またキーワードの上位を比較してみると、ともに授業を成立させるにあたって、改善的 content も共感的 content も共通したキーワードが多く表出していることがわかる。特に「言葉・発表・準備」についてはともに着目していることがわかる。また「めあて」についても授業における重要な着眼点と言える。これらは授業の前段階で十分に確認できる content であるため、指導案作成の段階でのさらに深く検討すべき content であると言える。さらに特徴的なものとして、共感的 content の「教具」である。効果的に授業を展開するためのものを総称して「教具」と記していると思われるが全般的に授業の充実した成立に直結していることがわかる。詳細の表記でなく「教具」とする点は充実した授業と感ずるうえで特徴的なものであると言える。

音楽指導上の content に関する項目については特に改善的 content に表出していることがわかる。「ピアノ」「伴奏」「リコーダー」「楽器」の表記では、伴奏を実際のピアノで演奏することの意味に重きが置かれており、その他楽器についても実際に教師が演奏してみせるなどの content に

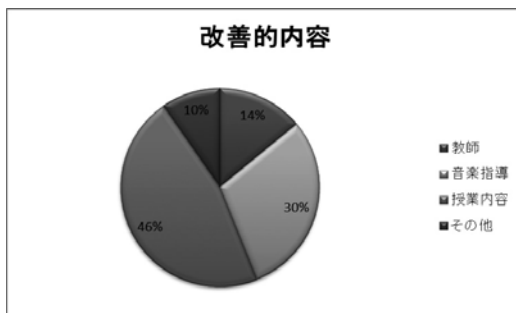
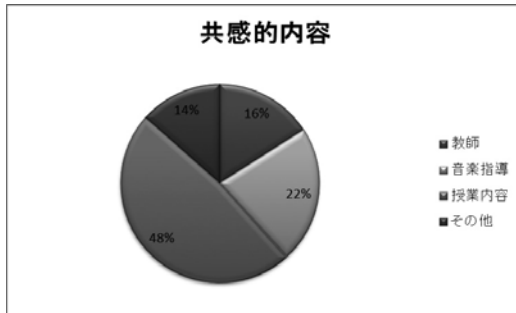
特に重きが置かれている。音楽科の授業においては楽器演奏等の重要性を教員養成段階の学生が持っていることがわかる。実技分野においては得意不得意など学生により差があるが、生の音により臨機応変に授業内で扱うことができるピアノ伴奏については重要であると感じていることがわかる。実際の教育現場においては音楽専科以外の教員も授業を行うため、そのすべてがピアノ伴奏を全面的に行っているわけではないが、教員養成段階において楽器演奏のできる教員に共感する傾向が窺える。さらに改善的内容においても、同様の傾向があり、CDの使用は副次的扱いと考え、児童の実態に即するためにやはり楽器の扱い、伴奏の扱い等に評価観点として着目していることがわかる内容であった。

またワークシートに関する記述が共感的內容、改善的内容においても記載されている。学年別においてもすべての学年において高い数値をあげており、教科書の扱いとともにワークシートの扱いが授業において重要なポイントになると感じていることが窺える。このワークシートの取扱いについては、音楽の授業においてはパフォーマンス評価などと異なり、文字表

記などで残すことができる1つの評価と繋がるものである。

[表2] 表出キーワード

改善的内容	共感的內容
発表	18
時間	17
言葉	12
ワークシート	12
説明	12
歌詞	12
振書	10
ピアノ	9
めあて	9
楽器	8
練習	8
確認	6
準備	6
教師	6
意味	5
注意	5
机間指導	5
授業	5
質問	4
先生	4
記号	4
図	4
掲示	4
子ども	4
指導	4
評価	4
演奏	3
教材	3
ゆっくり	3
表現	3
模造紙	3
テンポ	3
リズム	3
CD	3
文字	2
難しい	2
先生も一緒	2
強弱	2
伴奏	2
言葉遣い	2
リコーダー	2
指示	2
提示	2
児童	2
活動	2
時間確保	2
運送	2
理解	2
設定	2
スピード	2
選択肢	1
不得意	1
発表	1
音楽	1
教師の姿勢	1
工夫	1
具体的	1
高学年	1
活用	1
音符	1
演奏	1
姿勢	1
旋律	1
可塑性	1
態度	1
子どもの動き	1
まとめ	1
指揮	1
音	1
教科書	1
感想	1
ことば	1
言葉使い	1
教員	1
学習	1
歌う	1
専門	1
運指	1
運曲	1
時間配分	1
全員	1
手本	1
あいさつ	1
変化	1
内容	1
簡単	1
背景	1
勇気	1
ルール	1
教材研究	1
言葉の意味	1
場面	1
板書計画	1
階名	1
ひらがな	1
声かけ	1
復習	1
声掛け	1
個別	1
教材選択	1
目標	1
歌詞の意味	1
様子	1
上達	1
グループ	1
場所	1
個別指導	1
教具	17
声掛け	13
歌詞	11
言葉	9
準備	8
発表	8
めあて	8
机間指導	7
子ども	7
ワークシート	6
発言	6
授業	6
楽譜	6
表現	6
説明	5
教材	5
リズム	4
グループ	4
先生	4
楽器	4
楽しい	4
スピード	3
強弱	3
ピアノ	3
教師	3
理解	3
活動	3
板書	3
リコーダー	3
時間	3
役割	3
個別指導	3
指導	3
テンポ	2
意味	2
文字	2
練習	2
想像	2
評価	2
共感	2
問	2
運指	2
役割分担	2
発問	2
進行	2
CD	2
黒板	2
注意	1
音符	1
教材研究	1
確実	1
姿勢	1
態勢	1
スムーズ	1
確認	1
面白い	1
子どもの様子	1
個別	1
指示	1
大切	1
たのしい	1
提示	1
楽しく	1
音	1
時代背景	1
音源	1
自由	1
目標	1
手書き	1
様子	1
手本	1
合図	1
ルール	1
態度	1
あそび	1
知識	1
紹介	1
低学年	1
情景	1
把握	1
意見	1
演奏	1
生活	1
伴奏	1
環境	1
教材準備	1
声の大きさ	1
教室	1
環境構成	1
日記	1
責任	1
繰り返	1
イメージ	1
タイミング	1
休符	1
用意	1
先生も一緒	1
会話	1
ヒント	1
速さ	1



[グラフ1 改善的内容 共感的內容]

授業内容に関する項目では授業において「意味」理解「発表」「説明」へのキーワードから評価観点を持ちその内容から「わかりやすい授業であるかどうか」「授業内容のわかりやすさ」「めあて」「目標」の達成がなされているかという観点を持っていることが窺える。

今回記録の調査から顕著に表出したキーワードに「教師」があげられる。特に教師のパーソナリティーに関して記載されているものが一定量あることがわかる。協働し学びあう、アクティブラーニング授業が主流となってくる授業実践のなかにおいても「教師」というキーワードが学生によって表出されることは模擬授業においての特徴的な部分であると感じている。教師の態度や表情に関する表記が多かったことからわかるように教師に向けられる評価は授業内容もさることながら、授業においては非常に大きなウエートを占めていると感じていることがわかる。教師の共感的態度や声、表情などいずれの科目においても重要であろうが、特に音楽においては楽器などと含め教師の声による演奏や授業雰囲気作りは非常に重要である。

次にデータ個数が1の群について触れる。これは特に多岐にわたっている。共感的内容については、「タイミング」「間」「合図」「目配り」など細部にわたる評価観点を持って授業を受けていることがわかる。また改善的内容については、「教材研究」「教材選択」「時間配分」など計画段階でより深く準備できるであろう部分に対する意見が多いことがわかる。教員養成段階の学生が着目する観点であることから、実際の授業における必要性などと同様に見ることはできないが、教員養成段階の学生の評価の観点についてその傾向の一側面を見ることができたと感じている。

音楽技術的内容が共感的内容にも改善的内容においても重要な部分を占めていることは音楽科においてはその観点への扱いをより深く学ぶ要素となりうると思われる。

さらに授業において学生がその模擬授業をどのように評価しているかを毎回の授業後にルーブリック評価を実施し、本時が満足できるもの

であったかどうか、理解学習効果が上がるものであったか、本時の目標は達成されたかを尋ね(1)から見た傾向と実際の授業に対する評価にどのような傾向があるかを確認した。

[表3]は学年ごとにまとめた評価結果である。記録にあるような詳細な記載ではなく、模擬授業を実際に受け、学生が感じた内容について評価するものである。

概ね第1学年、第3学年、第4学年、第5学年、第6学年においては結果が分散されていることがわかる。この中で特に目標の達成度と理解・学習効果は呼応しており、授業における目標の設定は特に重要であり、理解できる内容であるかどうか、「何をどう学ばせたいか」「何ができるようになるか」ということがまさに重要であると言える。

これを受け前述の記録についてさらに詳細について考察する中で、一つの傾向が見られた。まず1点目は「教師の知識」これは、楽器についてや、歌唱、音楽的技術についての記載から教師が音楽的知識を持ちつつ授業をおこなっているかどうか、という部分に着目している記録である。その他の学年の記録からも、音符やリズム、拍についてあいまいな指示を出すこと、知識が不十分なまま授業を行っていることが明らかにわかる場合について、改善の評価が見られていることがわかった。学生の音楽的知識に関する評価が明確に行われていることは、ある意味学習の成果や評価がわかりづらいとされる音楽科の授業においては非常に望ましい傾向であると思われる。また、このことから音楽的知識や技能面においても教員養成段階において十分に修得しておく時期として重要な時期であると言える。

2点目は児童への振り返りが行われ評価の言葉があることがあげられる。模擬授業では、振り返りとなる活動が十分に取り入れられているか、活動を中心に終わるという授業ではなく、本時の学びを振り返る時間を持っているかが重要視されている。また、1つ1つの活動について教師が評価する言葉を発しているか、その学習の成果を確認しながら進んでいく状況

にあるかもポイントとなる。記録においても、共感的内容に「声掛け」「言葉」というキーワードが多かった授業においては、達成度の上がるものであった。

学習効果が上がる、満足できるものである、という評価が低かった授業について記録よりその傾向を考察すると、「準備不足から、内容に深まらない」「音楽の授業であるかどうか」「活動とめあてのつながりが無い」など教材研究と指導案作成に関する部分からの指摘が多いことがわかった。活動をしているようで、学習への深まりがない場合、また音楽技術面の指導はやはりポイントとなっているようである。楽器、歌唱、伴奏など音楽特有の授業準備については避けて通れない部分である。

これら考察から、今後、この段階での音楽授業を実施するにあたって学生が強化したいと感じられている部分の改善内容を検討する一つの糸口となったと言える。

特に顕著であったのは授業内のピアノ伴奏と声である。また伴奏等を含めた授業内での歌唱活動である。歌唱活動は、この段階にある学生は、基本的器楽内容、弾き歌い、基礎的楽典内容等の講義をすでに2年間に渡って学習している。音楽科に関する指導法や関連科目においても、弾き歌いの発表を必ず毎年課題として実施している。歌唱共通教材の学生の選曲状況は、[表4]の通りである。

学生の選曲から大半の学生は簡易伴奏を選曲している。その中で「さくらさくら」「春の小川」については特徴が見られる。「春の小川」は簡易伴奏選曲者が圧倒的に多い。楽曲については、第3学年の共通教材で扱いやすく感じ、歌唱しやすいが本格伴奏に困難を感じている状況にあることがわかる。本格伴奏の[譜例2]からもわかるように、右手8分音符が「小川」のように滑らかに演奏し、4小節ごとのスラーを意識しながら伴奏を演奏しなければならない。右手が主旋律のみを演奏しながら進む伴奏の形式ではない。それに比較すると簡易伴奏では、右手主旋律左手2分音符という非常に演奏しやすい楽譜となっている。歌唱しながらでも

弾きやすい楽譜を選択していることがわかる。歌唱の側面から考察する4分音符のみで歌唱主旋律が進行していることがわかり、非常に平易で歌唱しやすい楽曲である。複雑なリズムや大きな跳躍のない楽曲であり弾き歌いしやすい楽曲の1つであると言える。

また「さくらさくら」については第4学年の共通教材であり、日本古謡であり耳馴染みのある楽曲の一つである。本格伴奏と簡易伴奏の選曲者が同数であったが、本格伴奏では琴の音のような前奏が美しくこの楽曲の雰囲気を作りやすい。さらに歌唱に入ると右手和音により進行し、テンポも4分音符=72~80と比較的ゆったりとしたテンポである。「さくらさくら」の簡易伴奏は「春の小川」と同様に右手旋律、左手2分音符の構成となっている。本格伴奏を選択することで、歌唱が思うようにできなかつたり、途中で止まってしまったりする可能性もある中でより良く演奏できる方の伴奏譜を選択していることが窺える。

[譜例1 春の小川 簡易伴奏]

[譜例2 春の小川 本格伴奏]

しかし「われは海の子」「越天楽今様」「こいのぼり」「子もりうた」「スキーのうた」「冬げしき」「とんび」は選曲されなかった。特に高学年の楽曲を選択しない傾向が見られる。選曲されなかった理由はいろいろと考えられるが、リズムの複雑さやテンポの速さなど楽譜より読み取れる点が多い。

[表3] 授業後の評価

n=20

学年	項目	思う ⇄ 思わない				
		5	4	3	2	1
1	1 本時が満足できるものだったか	2	8	7	3	0
	2 本時は理解・学習効果の上がるものだった	2	5	9	2	1
	3 本時の目標の達成度	1	9	5	2	1
2	1 本時が満足できるものだったか	3	13	0	2	0
	2 本時は理解・学習効果の上がるものだった	5	11	3	0	0
	3 本時の目標の達成度	3	10	4	2	1
3	1 本時が満足できるものだったか	3	10	3	1	0
	2 本時は理解・学習効果の上がるものだった	2	14	1	0	0
	3 本時の目標の達成度	2	12	3	0	0
4	1 本時が満足できるものだったか	1	10	4	1	0
	2 本時は理解・学習効果の上がるものだった	2	6	8	1	0
	3 本時の目標の達成度	0	6	8	1	0
5	1 本時が満足できるものだったか	2	9	3	0	0
	2 本時は理解・学習効果の上がるものだった	2	9	3	0	0
	3 本時の目標の達成度	1	7	5	1	0
6	1 本時が満足できるものだったか	3	4	4	1	0
	2 本時は理解・学習効果の上がるものだった	0	7	5	0	0
	3 本時の目標の達成度	0	8	4	0	0

[表4] 歌唱共通教材弾き歌い選曲

歌唱共通教材 第3学年～第6学年 *前奏後奏を入れ1番のみを弾き歌い					n=30
学年	曲名	作詞者作曲者等	簡易伴奏	本格伴奏	
3学年	「うさぎ」	(日本古謡)	2	0	
	「茶つみ」	(文部省唱歌)	1	0	
	「春の小川」	(文部省唱歌) 高野辰之作詞 岡野貞一作曲	7	1	
	「ふじ山」	(文部省唱歌) 巖谷小波作詞	2	1	
4学年	「さくらさくら」	(日本古謡)	3	3	
	「とんび」	くず原しげる作詞 梁田貞作曲	0	0	
	「まきばの朝」	(文部省唱歌) 船橋栄吉作曲	0	1	
	「もみじ」	(文部省唱歌) 高野辰之作詞 岡野貞一作曲	6	0	
5学年	「こいのぼり」	(文部省唱歌)	0	0	
	「子もり歌」	(日本古謡)	0	0	
	「スキーの歌」	(文部省唱歌) 林柳波作詞 橋本国彦作曲	0	0	
	「冬げしき」	(文部省唱歌)	0	0	
6学年	「越天楽今様(歌詞は第2節まで)」	(日本古謡) 慈鎮和尚作歌	0	0	
	「おぼろ月夜」	(文部省唱歌) 高野辰之作詞 岡野貞一作曲	1	0	
	「ふるさと」	(文部省唱歌) 高野辰之作詞 岡野貞一作曲	0	1	
	「われは海の子(歌詞は第3節まで)」	(文部省唱歌)	0	0	

さらに音楽技術面での記述においては、「歌唱」についてもコメントが顕著であった。「教師の歌がよい」「人の声に合わせるほうが歌いやすい」「声が通って歌いやすい」「CDではあわせられない」「CDが教科書の楽譜と違う編集である」など教師が生の声で歌うこと、ピアノ伴奏であれば臨機応変に歌唱させることができることがきわめて非常に貴重であり、重要であると感じていることがわかる。音楽科ならではの回答であろうが、音楽を教える教員にとっては大切にしてほしい部分である。また教育現場の教員になってからも音を、声を大切に、生の音を児童に示すことができるような授業の構築をしてほしいと希求するものであり、養成段階の学生がそのような視点を持ったことは非常に喜ばしいところである。

5. まとめ

本稿においては、教員養成段階において学生が音楽科の模擬授業においてどのような観点で同じ志を持つ学生同志が評価を行うのか。またその傾向から現段階で必要な学習内容の改善が必要とされているかについて考察した。改善内容については授業内容が特化しており、共感的内容については「教員」について特に着目されていた。模擬授業が授業内容とともに、音楽的技術面の観点を必要とされていることがわかり、さらなる教育内容の改善の方向が見えた。

今後の課題としては教員養成段階だからこそできる教育内容をさらに深化させていきたい。

また教員養成段階の学生の現状を踏まえ今後教育現場における音楽を専門としない教師における音楽の授業構築や音楽的活動に関する指導についての比較をさらに研究発展させたいと考えている。

【引用文献】

- 1) 資料5 中央教育審議会大学分科会
大学院部会（第86回）H30.7.3

【参考文献】

- 1) 小学校学習指導要領（平成29年3月31日公示）文部科学省
- 2) 今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ【概要】平成30年6月28日中央教育審議会大学分科会将来構想部会
- 3) 音楽科模擬授業における学生相互の評価活動について 別府大学短期大学部紀要 第36号2017年藤田光子
- 4) 学習評価に関する資料 平成27年12月22日総則評価特別部会資5-2
- 5) 小学校 学習指導要領改訂及び新教育課程編成・実施のポイント 音楽 平成29年12月大分県教育委員会 平成28年7月7日
- 6) 教育課部会 総則・評価特別部会 参考資料2②
- 7) 音楽教育における資質能力の評価に関する研究—教員を目指す学生を対象としたパフォーマンス評価に着目して—静岡大学教育実践総合センター紀要 平成29年 服部慶子 長谷川哲也

【譜例】

- 1) 教員養成課程小学校音楽科教育法 教育芸術社2014
P94 P119